現代英語学へのアプローチ

山内信幸
北林利治 共編著

英宝社

現代英語学へのアプローチ

山内　信幸
北林　利治
共編著

英宝社

はしがき

現代社会では，政治・経済・文化などのさまざまな場面において，国境という境界を越えて，情報のやりとりがおこなわれている．このグローバル化が進む世界にあって，現代のリンガ・フランカ（lingua franca）としての地位を確固たるものにしているのが，英語という言語である．英語の優位性を示す例として，身近なものをいくつか挙げてみよう．

- あるウェブ調査（http://w3techs.com）によると，世界中のウェブサイトの約 50％強が英語で書かれている．
- あるインターネット調査会社の調査（http://semiocast.com）によると，ツイッターの言語別つぶやき総数で，英語は約 40％を占め，第 1 位である．
- 1 年間に各言語の話者によって生み出されるすべての最終的な商品とサービスの総市場価格の第 1 位は英語で，約 14.1 兆ドルである．

もちろん，数が大きければよいというものではない．母語の大切さは，それぞれの母語話者にとって同等のものである．しかし，いまや，グローバルなコミュニケーションにおいて，英語使用の圧倒的に優位な状況を無視するわけにはいかない．

これまで，一般には，英語の使われ方として，① English as a native language（母語としての英語），② English as a second language（第 2 言語としての英語），③ English as a foreign language（外国語としての英語）という 3 分類がなされてきた．私たちは，あくまで，「外国語」として英語を学んできたのである．しかし，今日では，「外国語としての英語」というよりは，「グローバル言語（a global language）」という括りで英語を理解する場面が圧倒的に多くなってきている．このような意味において，英語は，英語を使ってコミュニケーションをする人それぞれにとって，「地球語としての英語（English as a global Language）」，すなわち，「私たちの言語（our language）」となっているのである．

本書は，グローバル言語となった英語をさまざまな側面から取り扱うことによって，英語に関わる「すべて」を理解することを目指している．英

語学（English linguistics）とは，文字どおり，英語（English）の言語学（linguistics）のことであるが，英語学は，英語という言語を，構造的に，歴史的に，また社会的に記述・研究することを目指すものである．英語学の分野は，大まかに，英語の構造に直接関与するものと，英語の背後に存在する文化・社会現象として捉えるものとの2種類に分けることができる．本書では，従来の学問領域を踏襲した枠組みで記述・解説を試みるというアプローチではなく，英語を取り巻くさまざまな現象や要因，すなわち，英語の構造的な側面だけではなく，現代の英語の文化的・社会的な状況をもできるだけダイナミックに提示するという手法をとっている．これは，常に変化を遂げる，ダイナミックな対象としての英語の現状を認識し，英語を学ぶ意義と必要性を理解することを目指しているからである．

現代の英語学が扱うべきトピックについては，本書を読むうちに，自然と基本的な考え方が身に付くように，できるだけわかりやすく，平易なことばで描き，しかも，英語学の最新の知見も紹介するという，やや欲ばりな内容になっている．各章には，練習問題として，内容の理解を助けるために，Review Questions を2種類用意し，さらに，Further Tasks として，各章の内容を発展させて，読者自身が主体的に調べ，関連の内容の理解をふくらませていくことができるように配慮した．こういった試みがどれくらい成功しているかは，読者からのご叱正を待たなければならない．

出版社からの企画を受けて，本書の骨子を作る段階から，執筆者には何度も集まってもらい，意見交換がなされた．また，最終の原稿の編集，文言の統一の段階では，1日に何十本もの電子メールが交わされた．ようやく完成した本書は，まことに，執筆者全員によるコラボレーションの書であると言えよう．

最後に，この本の完成までの各段階において，常に温かい励ましと親身な心配りをいただいた宇治正夫氏をはじめとする英宝社編集部のスタッフの皆様には，心よりお礼を申し上げたい．

2013年8月
酷暑の京都にて

共編著者
山内　信幸
北林　利治

執筆分担一覧

第 1 章　地球語としての英語（山内信幸）

第 2 章　英語の誕生（友次克子）

第 3 章　近代英語の誕生（菊田千春）

第 4 章　英語の新大陸への進出（須川精致）

第 5 章　英語の地域的変種（伊藤徳文）

第 6 章　英語の地球的拡散（三浦秀松）

第 7 章　英語の社会的変種（金志佳代子）

第 8 章　英語の音声と音韻の仕組み（堀口誠信）

第 9 章　英語の語彙と意味（大岩秀紀）

第 10 章　英語の文構造―生成文法の観点から―（赤楚治之）

第 11 章　英語の文構造―認知言語学の観点から―（長谷部陽一郎）

第 12 章　英語の運用と表現の諸相（塩田英子）

第 13 章　英語の習得（川本裕未）

第 14 章　英語学と文学研究・文体論（石崎一樹）

第 15 章　英語学のチャレンジ（北林利治）

目　次

はしがき

執筆分担一覧

第1章　地球語としての英語 ····· **3**

1.　なぜ英語が必要なのか　3
1.1. 共通語・国際語（世界語）・地球語としての英語
1.2. 英語の拡張とその使用状況
2.　なぜ英語が広がったのか　6
2.1. 英語を取り巻く要因
2.1.1. 英語の文化的伝統
2.1.2. イギリスとアメリカの政治力と軍事力
2.1.3. イギリスとアメリカの経済力と文化力
2.2. 英語に内在する要因
2.2.1. 英語そのものの易化と統合の具現化
2.2.2. 文法の容易さ
2.2.3. 語彙の豊かさ
2.2.4. 発音の容易さ
2.2.5. 英語の「ピジン化」
3.　英語学とはなにか　10
3.1. 言語とはなにか
3.2. 言語学とはなにか
3.3. 言語学と英語学
3.4. 英語学の守備範囲
3.4.1. 英語学一般
3.4.2. 英語音韻学
3.4.3. 英語形態論
3.4.4. 英語統語論
3.4.5. 英語意味論
3.4.6. 英語語用論
3.4.7. 英語史
3.4.8. 英語方言論
3.4.9. 英語文体論
3.4.10. その他の分野
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第2章　英語の誕生 ····· **16**

1.　インド・ヨーロッパ語族　16
2.　英語の始まり　18
2.1. 英語が到来する以前のブリテン島
2.2. 英語の到来
3.　古英語　20

3.1. 文字と発音
3.2. 古英語の文法
3.3. 古英語の語彙
3.4. 古英語の作品
4. 中英語　26
4.1. 歴史的背景
4.2. 綴り字と発音の変化
4.3. 中英語の文法
4.4. 中英語の語彙
4.5. 中英語の作品
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第3章　近代英語の誕生 …… **34**

1. 歴史的背景　34
1.1. ルネッサンス
1.2. 印刷術の導入
1.3. 宗教改革と英訳聖書
1.4. エリザベス朝文学の開花：シェイクスピア
2. 初期近代英語の特徴　39
2.1. 音韻
2.1.1. 大母音推移
2.1.2. その他
2.2. 語彙
2.3. 文法
2.4. 初期近代英語の文例：『欽定訳聖書』（1611）
3. 英語の標準化：「正しい英語」を目指して　44
3.1. アカデミー設立運動
3.2. 辞書編纂
3.3. 規範主義的な文法書
4. 歴史から見た英語の特徴　47
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第4章　英語の新大陸への進出 …… **50**

1. アメリカ英語の誕生　50
1.1.「新大陸」への入植：初期の試み
1.2. 本格的な入植の始まり
1.3. 国民意識の高まり
1.4. 移民の流入
2. アメリカ英語とイギリス英語　54
2.1. アメリカ英語の特徴
2.2. アメリカ英語とイギリス英語の異同
2.2.1. 発音・アクセント
2.2.2. 語彙
2.2.3. 綴り字
2.2.4. 文法
3. アフリカ系アメリカ英語　61
3.1. アフリカ系アメリカ英語の起源
3.2. アフリカ系アメリカ英語の特徴
3.2.1 発音
3.2.2. 文法
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第5章　英語の地域的変種 ····· **66**

1. 多様なことば　66
1.1. 方言
1.2. 方言と標準語
1.3.「変種」という用語の必要性
2. イギリス英語　68
2.1. イギリス英語の地域的変種
2.2. RP と標準英語
2.2.1. RP
2.2.2. 標準英語
2.3. 標準英語における地域的差異
2.3.1. 否定形の縮約
2.3.2. 直接目的語と間接目的語の語順
2.3.3. 不変化詞を含んだ構文
3. アメリカ英語　74
3.1. アメリカ英語の歴史
3.2. アメリカ英語の多様性
4. 世界の英語　76
4.1. カナダの英語
4.1.1. カナダ英語の歴史
4.1.2. カナダ英語の多様性
4.2. オーストラリアの英語
4.2.1. オーストラリア英語の歴史
4.2.2. オーストラリア英語の多様性
4.3. インドの英語
4.3.1. インド英語の歴史
4.3.2. インド英語の多様性
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第6章　英語の地球的拡散 ····· **82**

1. ピジンとクレオール　82
1.1. ピジン
1.2. ピジンの言語的特徴
1.3. ピジンの文法的特徴
1.4. ピジンの語彙的特徴
1.5. ピジンからクレオールへの発展
2. アジアの英語　86
2.1. 南アジア
2.1.1. インド英語
2.1.2. インド英語の特徴
2.2. 東南アジア
2.2.1. シンガポール英語
2.2.2. シンガポール英語の特徴
3. 日本の英語事情　94
3.1. 日本人と英語
3.2. ニホン英語
3.3. カタカナ英語
3.3.1. カタカナ英語とは
3.3.2. カタカナ英語の実態
3.3.3. カタカナ英語の言い換え
3.3.4. カタカナ英語の有用性
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第7章　英語の社会的変種 ····· **100**

1. ことばの社会的変種　100
1.1. 社会階級（階層）
1.1.1. トラッドギル（1974）──イギリス・ノリッジ市での階級間の発音の相違の研究

1.1.2. ラボフ（1972）――ニューヨーク市における /r/ の変項の研究
1.1.3. バーンスタイン（1967）――言語使用能力の変種の研究
2. 言語と年齢　104
2.1. 年齢階層
2.2. 青少年期のことばの特徴
2.2.1. エッカート（1988）――デトロイト郊外における高校生の発音調査
2.2.2. クリスタル（2008, 2011）――若者ことばと携帯メール
3. 言語と性差　107
3.1. ことばの男女差
3.2. 英語に見られる性差
3.2.1. 女性語の特徴
3.2.2. 会話のスタイル分析
3.3. 英語の語彙に見られる性差
3.3.1. 総称としての he/man
3.3.2. 政治的な公正さ
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 8 章　英語の音声と音韻の仕組み ····· 114

1. 英語音声学の基礎知識　114
1.1. 基本母音図と母音の記述
1.2. 調音器官と子音の記述
1.2.1. 調音点による分類
1.2.2. 調音法による分類
2. 音韻論の基礎知識　121
2.1. 音素
2.2. 音素設定のための 3 つの手段：最小対立語・自由変異・相補分布
2.3. 分節音韻論と音声素性
3. 日本語と英語の音韻体系比較　124
3.1. 英語の音節と日本語のモーラ
3.2. アクセント
3.3. イントネーション
3.4. 英語における連続した発話
3.4.1. 音韻過程
3.4.2. 脱落・連結
3.4.3. 同化
3.4.4. 強形と弱形
3.5. 英語と日本語の音韻体系についての補足
3.5.1. 英語の /l/
3.5.2. 日本語のハ行音
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 9 章　英語の語彙と意味 ····· 133

1. 形態素　133
1.1. 形態素の定義
1.2. 形態素の分類
1.3. 形態素と異形態
2. 語の分類と語形成　137
2.1. 語の分類と語根・語幹・基体
2.2. 語形成
2.2.1. 派生
2.2.2. 複合
2.2.3. その他の語形成
2.2.3.1. 転換
2.2.3.2. 逆成

2.2.3.3. 省略
2.2.3.4. 頭文字語
2.2.3.5. 混成
2.2.3.6. 異分析
3. 語の意味 146
3.1. 成分分析
3.2. 意味関係
3.2.1. 同義関係
3.2.2. 上下（包摂）関係
3.2.3. 反義関係
3.3. 曖昧性—同音異義と多義性
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 10 章 英語の文構造——生成文法の観点から—— ····· 153

1. 文構造 153
2. 統語論 156
2.1. 句構造規則とセレクション
2.2. 統語テスト
3. 文の曖昧性 161
4. 補文標識と Wh 移動 163
4.1. 補文標識
4.2. 回帰性
4.3. Wh 疑問文
5. 文構造と意味 167
5.1. 統語論と意味
5.2. 代名詞の解釈と c 統御
6. 日本語の文構造 171
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 11 章 英語の文構造——認知言語学の観点から—— ····· 177

1. 認知言語学の考え方 177
2. 事態の概念化と捉え方 178
2.1. ベースとプロファイル
2.2. 視点と心的走査
2.3. メタファーとメトニミー
3. 認知文法 185
3.1. トラジェクターとランドマーク
3.2. アクション・チェイン
3.3. 繰り上げ構文
4. 構文文法の考え方 192
4.1. 構文とは何か
4.2. 代表的な英語の構文
5. 主観性 195
5.1. 主観性とは何か
5.2. 日英語での事態認識と主観性
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 12 章 英語の運用と表現の諸相 ····· 200

1. 意味とコンテクスト 200
1.1. 直示表現
1.2. 照応と情報構造
1.3. 前提推意と非字義的解釈
2. 語用論の誕生と非字義的意味 206

2.1. 発話行為理論と発話行為文
2.2. 間接発話行為
2.3. 協調の原理と会話の格率
3. 話し手の意図から聞き手の解釈へ 213
3.1. 関連性理論
3.2. 中間話法とその効果
3.3. ポライトネス
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 13 章 英語の習得 ····· 222

1. 動物の「ことば」と人間の言語 222
1.1. 動物の「ことば」
1.2. 人間の言語の特性
2. 子どもの言語習得過程 225
2.1. 喃語期
2.2. 1 語文期
2.3. 2 語文期
2.4. 3 語文期
2.5. 子どもの言語習得過程からわかること
3. 母語の言語習得理論 229
3.1. 経験主義的言語習得理論
3.2. 生得性仮説
4. 非母語としての英語の習得 233
4.1. 臨界期
4.2. バイリンガリズム
4.3. 外国語としての英語習得
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 14 章 英語学と文学研究・文体論 ····· 238

1. 構造主義 238
1.1. レヴィ＝ストロースの仕事
1.2. イーグルトンの仕事
1.3. ソシュールの仕事
1.4. フライの仕事
2. ロシア・フォルマリズム 242
2.1. ソシュールとロシア・フォルマリズム
2.2. ヤコブソンの仕事
3. 文体論 245
3.1. 文体論の守備範囲
3.2. 文献学あるいは文学研究としての文体論
3.3. 文体論研究の新潮流
3.4. 文体論的分析の実際
3.4.1. 文断片
3.4.2. 不定形動詞
3.4.3. 時制
3.4.4. 固有名詞
3.4.5. 上記の文体的特徴による効果
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

第 15 章　英語学のチャレンジ ····· **252**

1.　英語学における「説明」とは　252
1.1. 英語の歴史的・社会的背景からの説明
1.2. 言語理論からの説明
2.　英語の普遍的側面と個別的側面　256
3.　言語と文化　258
3.1. サピア・ウォーフの仮説
3.2. 言語相対論をめぐる最近の動向
3.3. 英語の語彙と文化背景
3.4. 英語の文法・運用と文化背景
4.　地球語としての英語と英語学のチャレンジ　263
Review Questions I
Review Questions II
Further Tasks

参考文献 ····· 265

あとがき ····· 283

索引 ····· 000

編者略歴・執筆者紹介 ····· 000

第１章
地球語としての英語

英語の必要性や重要性をあらためて説くまでもなく，英語は，われわれの日常生活のあらゆる場面に，さまざまな形で浸透している．英語を母語とすることもなく，英語の直接使用を強制された経験をもたない日本では，長らく英語は、学ぶべき対象ではあったが，日常生活を送るうえでの必需品としての認識は，ごく一部の人を除いては，皆無に等しかった．

しかしながら，グローバル化時代の到来とともに，移動手段の利便化や迅速化に加えて，情報伝達のためのＩＴ機器の普及と進化によって，地球がますます「小さく」なってきている．これは，地球全体の物理的な縮小を意味しているのではなく，従来の国境を越えたより広範囲にわたる人的交流を活性化させることによって生じた社会的情勢を意味するものである．

本章では，なぜ英語が必要なのか，なぜ英語が広まったのか，英語学とはなにかという問いかけを基にして，英語に関する一般的事柄と英語学の守備範囲を理解することを目指す．

1. なぜ英語が必要なのか

1.1. 共通語・国際語（世界語）・地球語としての英語

英語は，現在，お互いの文化のアイデンティティは尊重しながらも，相互理解のための必要な共通語（common language），いわゆる，リンガ・フランカ（lingua franca）として，母語の如何を問わず，世界で通じる唯一の言語と見なされている．これは，政治面・経済面・文化面・宗教面など国際的な舞台でコミュニケーションの手段として用いられる国際語（international language）あるいは世界語（world language），さらには，国境にこだわらない広がりを見せている英語の現況を示すより適切な呼称として，地球語（global language）とも呼ばれる所以である．

全世界で通じる地球語としての英語の今日的地位と比べると，たとえば，中世ヨーロッパでの宗教・学術のためのラテン語，アフリカ諸国での通商のためのスワヒリ語，大西洋をまたがって本国スペインと南アメリカ諸国で用いられるスペイン語，イスラム世界に広く通じるアラビア語などは，一種の国際的共通語と言えるであろうが，地球規模に亘る地球語としての英語の果

たす役割や機能には遠く及ばない．

現在，英語は，アメリカ，カナダ，イギリス，アイルランド，オーストラリア，ニュージーランド，南アフリカに加えて，東南アジアやカリブ海沿岸諸国で第1言語（first language）として用いられたり，あるいは，公用語（official language）として掲げられたりしている．また，英語は，たとえ公用語としての地位は与えられていなくても，その国の外国語教育において高い優先順位を付けられているなど，全世界で100を超える国々の非英語母語国で特別な地位を享受し，もっとも広く教授されている外国語である．もちろん，ここでの「特別な地位」とは，たとえば，単独の公用語あるいは共同の公用語の1つで，それが法律によって規定されている場合であったり，歴史的経緯によって，英語が唯一あるいは圧倒的に優勢な言語となっている場合であったり，さらには，公用語としての資格は失ったけれども，いまだに重要な役割を維持し続けている場合であったりする．いずれの場合でも，英語がその国の根幹的アイデンティティを構成している，あるいは，その一部をなしている，または，重要視されているということができる．

英語に与えられたこのような地球語としての地位は，主に，2つの理由によって支えられてきたと考えられる．1つは，近代初期の大英帝国の植民地主義に基づく海外進出による国力の興隆である．もともとは，ローマ帝政時代のシーザー（Julius Caesar）のブリテン島への侵略を皮切りに，幾多の異民族の襲来を受けながらも，11世紀～12世紀頃までは，英語という言語に関しては，主に，ブリテン島内での醸成にとどまっていた．その後も，16世紀末までは，国際語・地球語としての評価を得るには至らなかった．しかしながら，17世紀に入ってからは，アメリカやカナダなどへの植民地化政策が強力に推し進められ，英語は，北半球においては，西方向に向かって，急速にかつ大規模に拡大していった．さらには，アメリカ植民史の初めには，アフリカからの黒人奴隷の輸入によって，カリブ海地域といった南方向へも広がりを見せつつあった．さらに，18世紀末にかけては，大航海時代の延長線上に，イギリスの世界進出は継続・拡大し，オーストラリアやニュージーランドといった南半球においても，英語の地盤が徐々に固められていった．19世紀末には最高潮に達したイギリスの植民地主義的海外進出と，それに伴う強大な植民地支配が，後の英語の地球語としての地歩作りに大きく貢献したことは想像に難くない．

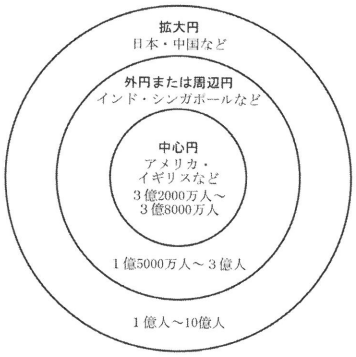
また，もう1つの理由としては，20世紀になってからの国際舞台への政

治・経済・軍事大国としてのアメリカの台頭が挙げられる．今日，英語が地球語としての地位を保持している背景は，英語を母語として用いている世界人口の約 70％をアメリカ人が占めていて，その政治的・経済的・軍事的影響力が全世界に亘って決定的な影響を与え続けていることにその一因を求めることができる．

1.2. 英語の拡張とその使用状況

Kachru（1988: 5）は，英語の世界規模の拡大の経緯と英語の習得形態ならびに使用状況との関連性について，3 つの同心円を使って説明している．下図は，クリスタル（1999: 76）の図版を一部修正したものであるが，上記で述べた英語を取り巻く今日的状況を的確に示すものとしてよく知られたものである．

（1）英語の 3 つの「円」



［クリスタル（1999）p. 76）一部改編］

中心円は，伝統的な英語の基盤となる部分で，英語を公用語として主要言語と見なして使用している国で，アメリカ，イギリス，アイルランド，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドが含まれる．総計にして，3 億 2,000 万人～ 3 億 8,000 万人となる．（クリスタル（1996: 84）は，3 億 3,700 万人と推定している．）

外円または周辺円は，非母語としての英語が拡大していく初期段階にあり

ながらも，英語がその国で主要な言語として公式に用いられ，多言語環境のなかで第 2 言語（second language）として位置づけられている国を指す．インドやシンガポールなど，50 を超す諸地域を含み，総計にして，1 億 5,000 万～ 3 億人を数える．（クリスタル（1996: 84-85）は，2 億 3,500 万人と推定している．）

拡大円は，国際的な英語の重要性は認めつつも，過去に中心円に所属する諸国による植民地化の背景はもたずに，また，英語に何らかの公的な行政面での役割は付与していない国で，日本，中国，ロシア，オランダなどの国を含む．これらの地域では，英語は外国語として教えられている．総計にして，1 億～ 10 億人の概数となる．（クリスタル（1996: 85）では，母語または母語並みの英語力をもつ人数で 6 億 7,000 万人，他方，母語並みの流暢さではなく，ある程度の習熟度をもつ人数で 18 億人と推定し，その中間的数字として，12 億～ 15 億人という数字をはじき出している．）

1 国家としての人口は，中国が約 15 億人という世界最大の数を誇るが，中国語は，北京官話（普通話）を標準語としながらも，数多くの異なった方言が存在しており，しかもその方言差は大きく，ほぼまったく異なる外国語と言える状況にある．一方，英語は単一言語では世界最大の人口を誇っており，合算すると，中心円・外円・拡大円の一員として特別な地位を占めてきた地域は 75 以上にのぼり，推定話者数は，最大に見積もって，16 億人以上となる．

2. なぜ英語が広がったのか

英語がこのような世界規模の広がりを見せるようになった要因を，石黒他（1993）を参考に，英語を取り巻く要因と英語に内在する要因に分けて，概述してみよう．

2.1. 英語を取り巻く要因

2.1.1. 英語の文化的伝統

まず，英語の拡張の主要因としては，英語そのもののもつ連綿とした文化の伝統を挙げることができる．5 世紀に英語の原型が北ヨーロッパの異民族の侵攻によってイングランドに入ると，またたくまにブリテン島全体に拡大し，ケルト語諸語が優勢であったウェールズ（Wales），コーンウォー

ル（Cornwall），カンブリア（Cumbria），南部スコットランド（Southern Scotland）にも浸潤していった．1066年のノルマン人の侵入（Norman Conquest）以後，イギリスの貴族たちは北のスコットランドに逃れ，やがてスコットランド低地地帯で独特の言語的特徴をもつ英語を醸成させていった．12世紀には，アングロ・ノルマン系の騎士たちがアイルランドに遠征し，この島に英語を浸透させる一役を果たした．

英語文化は，幾多の異民族の侵攻という試練に耐え，その都度それを糧にして英語として成長を続けていった．古くは，古英語期の『ベオウルフ（*Beowulf*）』や中英語期のチョーサー（Geoffrey Chaucer）の一連の作品群にその黎明を見ることができるが，他のヨーロッパ諸国の文芸と比肩できるのは，16世紀のシェイクスピア（William Shakespeare）の登場を待たねばならなかった．ただ，それ以降は，各時代に優れた文学者と文学作品を輩出し，英語ならびに英語文化の伝統を着実に築き上げていった．

2.1.2. イギリスとアメリカの政治力と軍事力

次に，英語国の代表格であるイギリスとアメリカが西側陣営の主導的役割を担ってきたことが挙げられる．両国は，その強大な政治力・軍事力に加えて，外交力を駆使して，第2次世界大戦以後の西側諸国を主導し，十分すぎる地歩を固めてきた．近代以降，大英帝国としてその揺るぎない地位をほしいままにしていたイギリスも，第2次世界大戦以降は，その勢力も陰りを見せ始め，折しも植民地化していた多くの地域が，民族自決主義運動に支えられ，独立国として自立していくことによって，全世界に広がっていた国土も大幅に縮小せざるをえなくなった．一方，後発ではありながら，アメリカは，戦勝の余力と豊かな天然資源を背景に，その国力は増大し，イギリスを凌いで，世界の政治・経済分野での主導的役割を担うようになった．とりわけ，第2次世界大戦後の軍事的影響力は強大で，それによって，占領下に収めたそれぞれの地域の文化には英語の影響が色濃く反映することとなった．

2.1.3. イギリスとアメリカの経済力と文化力

資本主義経済体制下にあって，第2次世界大戦後，主に，アメリカの影響で，経済平等主義が商品の流通と販売を促進し，その思想に支えられた生活水準の向上が，イギリスとアメリカの立場をいっそう優位にさせた．

さらに，政治的イデオロギーや文芸的思潮の普及を目指して，幾多の宣

伝機関が設立された．たとえば，世界各地にブリティッシュ・カウンシル（British Council）やアメリカ文化センター（American Cultural Center）（現在のアメリカンセンター（American Center））が開設された．これらの施設を通じて，被占領国の国民は，図書や映画の貸し出し，英会話学習，映画鑑賞会の案内，さらには，留学準備の情報などが無料で提供された．これらを目の当たりに見せられた側の立場からすると，英米文化の優位性を無意識のうちに，あるいは，無批判に受け入れていくようになっていったのも不思議ではない．

このような一見あからさまな政治的・商業的宣伝や誘導を支えたのは，他でもなく，その豊かな経済力であった．その経済力によって，出版，商品開発，広告宣伝に多額の資本投下が可能となり，そのための手段としての英語の使用が飛躍的に伸びた．また，教育水準の高さ，インターネットを活用した情報伝達の自由度と効率性なども側面的に英語の絶対的普及を後押しした．

2.2. 英語に内在する要因

2.2.1. 英語そのものの易化と統合の具現化

英語の歴史は，幾多の時代的変遷はあるものの，大きく見れば，複雑な，ある場合は，余剰的な要素はできるだけ削ぎ落とされて，一部の特権階級だけのことばではなく，一般大衆に広く受け入れられることばとなるべく，難から易への発達を遂げてきたと言うことができる．また，英語は，文化的には，原初のケルト文化，ラテン文化，北欧文化，ゲルマン文化というように，汎ヨーロッパ的性質を備えながら，民族的にも，ケルト，ラテン，北欧，ゲルマンの文化的混血を受け入れ，ヨーロッパ文化の統合の一面を具現化していると言える．

2.2.2. 文法の容易さ

英語の文法は，他のヨーロッパの諸言語と比べて，その体系は学ぶのに容易であると言われている．英語の歴史的変遷をひもとくと，ヨーロッパの他の大部分の言語がもつ屈折言語（inflectional language）としての性格から，分析言語（analytical language）へと変化していったことが大きな要因であると考えられている．名詞や代名詞などの格変化を示す語尾の脱落によって，語順が固定化したこと，動詞の活用変化が消失したり，簡略化したりし

たこと，それによって，豊かな表現形式が発達したことなどによって，現代語としての姿を保っていると言われている．

2.2.3. 語彙の豊かさ

英語の語彙は，世界でもっとも包括的な単一の言語による辞書刊行物として，世界最大の英語辞書である『オックスフォード英語辞典（*Oxford English Dictionary; OED*）』の所載で，約 60 万語と言われ，そのなかには，ギリシャ語やラテン語の古典語を始め，ヨーロッパのほぼすべての現代語，さらには中東，東南アジア，中国，日本を含めた東アジアに至るまで，さまざまな国からの借用語を包含している．その寛大な，ときには，大胆な摂取精神が英語を最大の語彙数を誇る言語に仕立て上げている．

2.2.4. 発音の容易さ

英語は，世界の言語を音調形式で分類したときに，強弱型言語（stress language）に分類される．高低型言語（pitch language）の 1 つである日本語や音調型言語（tone language）の 1 つである中国語と比べて，英語は，ある音節を強く発音することによって意味伝達が可能となる，もっとも発音の容易な型に属している言語である．さらに，英語は，その音体系として，それを支える音素の数も比較的少なく，このことも英語の発音を簡易にしている要因の 1 つである．

2.2.5. 英語の「ピジン化」

ピジン語（pidgin）とは，複数の関連地域において，お互いに交易目的で，最低限意思疎通が可能な，簡略化された言語を意味する．また，ピジン英語（pidgin English）とは，もともとは，中国語，ポルトガル語，マレー語などを混合した中国の通商上の英語を指し示す用語であった．

英語は，歴史的に見ると，一種のピジン語として位置づけることができるが，今日の英語が呈している様相は，あらゆる分野に亘って，共通の話題を論じることのできる手段として，豊かな語彙を伴って，できるだけ容易な文法と発音を備えた現代的ピジン性を具備した言語であると言うことができよう．

3. 英語学とはなにか

英語学（English linguistics）とはなにかを考える前に，言語（language）とその言語を研究対象とする言語学（linguistics）について，共通理解を深めておくことにしよう．

3.1. 言語とはなにか

言語の定義は数多く存在するが，そのなかでも，要点をうまくまとめたものの 1 つとして，Wardhaugh（1977: 3）からの引用を紹介しよう．

（2）Language is a system of arbitrary vocal symbols used for human communication.
（言語は人間のコミュニケーションに用いられる恣意的な音声記号の体系である．）

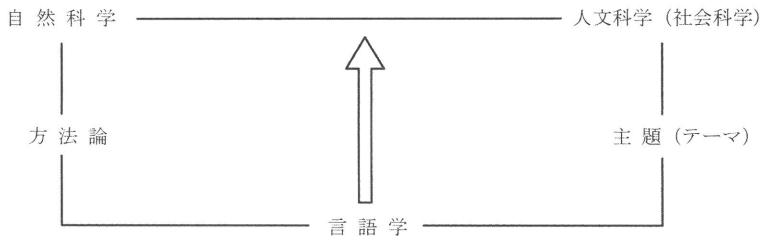
この定義は，言語の本質的特徴をうまく表したものと言える．上述の定義のキーワードを順不同に簡単に説明しておこう．

まず，言語は「人間（human）」固有のものである．人間が言語を自由に操れるのは人間が生来的にもつ言語能力による．言語は「体系（system）」をなしていて，言語を形成しているそれぞれの要素である音，語，文，意味は，おのおの独自の体系をもっている．また，言語の基本単位は音声であり，言語の大部分は，「音声を用いた（vocal）」表現形式である．言語はすべて意味を伝える「記号（symbol）」から成り立っているが，言語に用いられる単語の音とその意味の間には，まったく必然的な関係はなく，ただ偶発的な，つまり，「恣意的な（arbitrary）」結びつきしかないのである．このようなさまざまな特徴を兼ね備えた言語を使って，われわれはお互いの意思疎通を可能とし，有効な「伝達（communication）」をおこなっているのである．

3.2. 言語学とはなにか

言語学は，人間言語を科学的に分析・研究する学問である．言語学の位置づけとして，以下の図を基に説明してみよう．

(3) 言語学の位置づけ



言語学に適切な地位を与えるとするならば，自然科学（natural sciences）と人文科学（humanities）（ならびに社会科学（social sciences））をつなぐ架け橋のような役割と見るのが妥当であろう．言語学は，原則として，その方法論としては，人間以外のものを研究対象とする自然科学のそれに準拠している．つまり，まず，データを収集し，それを観察し，一定の分析を経て，ある仮説を設定し，それの検証を繰り返しながら，最終的にはデータから導かれるある種の一般化をおこなうことを目指すものである．他方，人文科学（ならびに社会科学）の究極の目的は，その対象に異同はあっても，最終的には「人間とはなにか」という人間理解を目指すものであり，人間を人間たらしめている言語を主題（テーマ）とする限り，きわめて人間的なものである．言語は，人間理解のための人間学の中心的主題と言うことができよう．その意味で，言語学とは，方法論としてはきわめて自然科学的で，そのテーマとしては，すぐれて人文学的であり，この2つの学問領域をうまく橋渡しして，つなぐ働きをしていると言うことができる．

3.3. 言語学と英語学

地球語としての英語の重要性はすでに述べてきたが，この英語を研究対象とする英語学とはいったいどのような学問であろうか．端的に言うと，英語学とは，上述の言語学の研究手法に則って，英語という個別言語の特質を研究対象とする学問分野である．言語学と英語学の関係は，「一般」と「個別」の関係にあると見ることができる．現代的な意味合いにおいて，両者はきわめて密接な関係を保持していて，言語学で開発された一般的な理論は英語学に適用されて，その実態をあきらかにすることに貢献し，他方，英語学で発

掘された英語の個別的言語事実は，言語理論の一般化には不可欠なものである．すなわち，言語学が一般的な原理の探求に向かうのに対し，英語学は，原理づけられた英語の文法に則り，英語の個別的な性質や事柄を扱う．

3.4. 英語学の守備範囲

本書では，従来の学問領域を踏襲した枠組みで記述・解説を試みるというアプローチではなく，英語を取り巻くさまざまな現象や要因をできるだけダイナミックに提示するという手法をとっている．そのため，学問としての英語学の分野の名称で章立てはおこなってはいないが，今後のさらなる学習のために，伝統的な用語を用いて，英語学の扱う範囲を明らかにしてみよう．

3.4.1. 英語学一般

英語全般の諸特徴を概述し，英語学のさまざまな射程を明示して，英語ならびに英語学とはなにかについて一般的な理解を与えることを目指す．また，言語学の一部としての英語学では扱えない，人間の言語と動物のことばの違いを基にした言語の一般的特徴や言語習得などの情報についても提供する．本書では，第 1 章・第 13 章・第 15 章が該当する．

3.4.2. 英語音韻学

英語音韻学（English phonological studies）は，英語の音声を研究対象として，英語の音のもつさまざまな特性を取り扱う．英語音韻学は，英語の音声の物理的特性について，話し手の立場や聞き手の立場などから分析をおこなう英語音声学（English phonetics）と，英語の音声のもつ特性と意味の間に介在するメカニズムを扱う英語音韻論（English phonology）に大別される．本書では，第 8 章が該当する．

3.4.3. 英語形態論

英語形態論（English morphology）は，英語の語の内部形式や語の形成を取り扱う分野である．語が意味を担う最小の要素から成り立ち，それぞれの要素がどのような機能を果たしているかを研究し，また，新しい語としての造語のプロセスにおいてどのような規則が働いているかを解明する．本書では，第 9 章が該当する．

3.4.4. 英語統語論

英語統語論（English syntax）では，語がいくつか集まって構成される英語の文を研究対象とする．統語論は，狭義の「文法（grammar）」として，古くは，ギリシャ・ローマ時代に遡って，文字で書かれたものを読み解く術（art）としての伝統をもつが，その後，19 世紀に入って以降，伝統文法（traditional grammar）や構造主義言語学（structural linguistics）の名の下，科学としての客観性に基づき，その言語構造の客観的記述を目指した．20 世紀には，生成文法（generative grammar）として，各言語間の普遍性の発見と文の生成プロセスの解明に関心が移ってきた．本書では，第 10 章・第 11 章が該当する．

3.4.5. 英語意味論

英語意味論（English semantics）では，狭義の意味として，英語の語・句・文の意味を扱う．従来から，意味の記述については，客観的なアプローチが難しいとされてきたが，最近では，本書でも紹介するように，語・句・文といったそれぞれの文法単位ごとにより精緻な分析方法が開発され，理論的・構造的研究が可能となっている．本書では，第 9 章・第 11 章・第 12 章が該当する．

3.4.6. 英語語用論

英語語用論（English pragmatics）では，広義の意味として，話し手と聞き手を含むコンテクストにおける言語表現や言語習慣などの意味機能を探る．旧来の意味論では扱いきれなかったダイナミックな言語現象を取り扱う．本書では，第 12 章が該当する．

3.4.7. 英語史

英語史（English history）は，文字通り，英語のたどってきた足跡を史的事実と関連させて，その発達や変遷を通時的なアプローチとして，英語の音韻・形態・文法上の史的変化を取り扱う．本書では，第 2 章・第 3 章が該当する．

3.4.8. 英語方言論

英語方言論（English dialectology）では，上述の英語史とは異なり，全世

界に見られる英語の拡張状況を共時的な観点から記述・分析する．もともとは，イギリスに端を発した英語が，アメリカ・カナダ・オーストラリアなどで用いられる英語の変種として発達し，さらには，母語以外の英語としても飛躍的な発展・拡散を続けている英語の状況を，記述面のみならず，理論的側面からも取り扱う．本書では，第 4 章・第 5 章・第 6 章・第 7 章が該当する．

3.4.9. 英語文体論

英語文体論（English stylistics）は，作家が用いた文体の記述・分析をおこなう．従来は，研究者の主観的判断で取捨選択された事象について，その心理分析を中心に研究がなされ，文学作品やテクストの史的研究や個別作家の語学的解釈，さらには，広範な領域を統合したアプローチとしての言語思想史などが含まれる．最近は，一人の作家のすべての作品をデータベース化し，それぞれの語彙の出現頻度や使用傾向などについて統計的手法を活用してあきらかにする研究もおこなわれている．本書では，第 14 章が該当する．

3.4.10. その他の分野

その他として，たとえば，英語辞書学（English lexicography）は，すべての言語のなかでもっとも充実した内容を誇る英語に関するあらゆる辞書を研究対象として，その辞書作成上の原理や主義などをあきらかにすることを目的とする．最近では，辞書編集の技術論や目標論なども含まれる．

設　問

Review Questions I　以下の用語や事柄を 1 ～ 2 行程度で解説しなさい．

1. 地球語としての英語
2. 言語の定義
3. 言語学の定義
4. 自然科学としての言語学
5. 言語学と英語学の関係

Review Questions II　以下の 3 つの用語や語句を用いて，3 ～ 5 行程度で意味の通る陳述をしなさい．（この順番で記述する必要はなく，順不同．）

1. 共通語，国際語，地球語
2. 英語の拡張，Kachru の中心円，第 1 言語（公用語）
3. 強弱型言語，分析言語，ピジン化

Further Tasks　具体的な分析例として，以下の設問に答えなさい．

1.「ブリティッシュ・カウンシル」のサイトを見て，英語の普及や英語教育について，どのような活動を展開しているかを調べなさい．
2. ソシュール（Ferdinand de Saussure）の用語である「共時態（synchrony）」と「通時態（diachrony）」を調べて，これらについて，“husband” を例に挙げて説明しなさい．

第2章
英語の誕生

言語の歴史はその言語を話してきた民族の歴史を映し出す．英語の約1500年間の歴史は，ブリテン島で展開されてきた民族同士の戦いと社会的発展が引き起こした変化と成熟の歴史でもある．英語の歴史をたどると，なぜ英語は語彙が豊かなのか，綴り字と発音が一致しないのか，不規則動詞が存在するのか，などの疑問に答えることができる．

英語の歴史は3つに区分される．時代区分については，学説により，多少の異同が見られるが，本書では，次のように分ける．

古英語（Old English, OE）700-1150
中英語（Middle English, ME）1150-1500
近代英語（Modern English, ModE）1500-
初期近代英語（Early Modern English, EModE）1500-1700
後期近代英語（Late Modern English, LModE）1700-1900
現代英語（Present-day English, PE）1900-present

「古英語」をアングロ・サクソン人がブリテン島に侵入した450年頃を始まりとする見方もあるが，本書では，英語の文献が出現した700年頃を始まりとし，12世紀前半にイングランドがノルマン人に征服されて，支配者層の言語がフランス語になるまでの期間とする．「中英語」は，支配者層の言語がフランス語になったことから，英語が歴史の表舞台から消え，約300年後に復活したときには大きく姿を変えた時期とし，その終わりは，15世紀後半の印刷術の発明と大母音推移とする．「近代英語」は，その前半は，シェイクスピアの活躍や『欽定訳聖書』の出版などによる，今日の英語が確立する重要な時期として，「初期近代英語」として位置づけ，後半の「後期近代英語」と区別したり，さらに，20世紀以降の英語を「現代英語」と呼んだりする場合がある．

1．インド・ヨーロッパ語族

歴史的に見て，ブリテン島へはたえず大陸から民族や言語の流入があったため，まず，英語の位置づけとして，インド・ヨーロッパ語族のなかで英語に関係する系譜を見ておこう．

し，紀元前 3500 年頃から各地に移住し，相互の接触が少なくなるにつれ，異なった言語を話すようになったと考えられている．

インド・ヨーロッパ語族のなかで，英語はゲルマン語派（Germanic）に属する，低地西ゲルマン語（Low West Germanic）である．一方，後に語彙の面で英語に大きな影響を与えるのがラテン語とフランス語である．

2．英語の始まり

2.1. 英語が到来する以前のブリテン島

ブリテン島には先史時代より民族が居住し，その後，時期については紀元前数百年から千年の諸説があるが，ケルト人（Celts）が大陸から島に渡って定住した．紀元前 55-54 年には，カエサル（Julius Caesar）がブリテン島に侵攻し，島の南東部はローマ帝国の交易に組み込まれるようになった．約 1 世紀後の紀元 43 年に，ローマ皇帝クラウディウス（Claudius）によって島は征服され，ケルト人（ブリトン人）はローマ帝国が弱体するまでの約 400 年もの間，ローマに支配された．2 世紀には，皇帝ハドリアヌス（Hadrianus）により，北方のスコットランド（カレドニア（Caledonia）と呼んだ）との境に北方民族（ケルト人の一派）の侵入を防ぐハドリアヌスの長城（Hadrian’s Wall）が築かれた．ブリタニア（Britannia）はローマ人によるブリテン島の帝国領土の呼び名である．

2.2. 英語の到来

大陸でゲルマン民族の大移動が始まると，ローマ軍はブリテン島から撤収した．410 年に最後のローマ兵が去った後，現在のデンマークとドイツ北部海岸地域からアングル人（Angles），サクソン人（Saxons），ジュート人（Jutes）の 3 部族がブリテン島に侵入してきた．歴史家ビード（Bede）の手によって 731 年に著された『英国民教会史（*Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*）』には，北方民族の襲撃に苦しむブリトン人の王に招聘されて，449 年からゲルマン民族が渡来し，その後，ブリテン島を侵略して，定住したことが記されている．侵入したゲルマン民族の言語は西ゲルマン語であった．彼らは総称してアングロ・サクソン人（Anglo-Saxons）と呼ばれ，彼らの言語が英語の始まりである．“England” という呼称は “Englaland”（アングル人の土地）に由来する．アングロ・サクソン人はもともと異教徒であっ

たが，597 年に聖アウグスチヌス（St. Augustine）が布教に派遣されてから，急速にキリスト教に改宗した．

古英語の方言は，侵入者の言語を反映して，アングル人が多い北方のノーサンブリア方言（Northumbrian）と，テムズ川とハンバー川に挟まれたイングランド中央部のマーシア方言（Mercian），ジュート人が定住したイングランド南東端のケント方言（Kentish），サクソン人が定住したテムズ川の南の地域の西サクソン方言（West Saxon）に分かれる．

（3）ゲルマン民族のブリテン島侵入

［Crystal（1988）p.156 参照］

さらに，8 世紀後半からは，スカンジナビア半島や現在のデンマークからヴァイキング（Vikings）と呼ばれる海賊が襲って来た．彼らはデーン人（Danes）と呼ばれ，その言語は北ゲルマン語の古ノルド語（Old Norse または Scandinavian）である．ヴァイキングのイングランド征服は，南西部ウェセックスのアルフレッド大王（Alfred the Great, King of Wessex）によって阻まれたが，王と結んだ条約により，デーンロー地域（Danelaw，デーン人の法が及ぶ地域）と呼ばれたイングランド北東部の広大な地域に定住した．デーンロー地域には，現在も多くの北欧起源の地名が残っている．

デーン人をデーンロー地域に押しとどめたアルフレッド大王は，軍事面

での強化だけでなく，学問の興隆にも力を入れ，重要なラテン語の文献を英語の散文に翻訳させた．また，王の指導の下，『アングロ・サクソン年代記（*The Anglo-Saxon Chronicle*）』が 890 年頃から記され，そのなかの『ピーターバラ年代記（*The Peterborough Chronicle*）』は 1154 年まで続けられた．古英語の文献はヴァイキングの襲撃により多くが破壊されたため，現在まで残っているのは西サクソン方言のものが多い．

3．古英語

3.1. 文字と発音

アングロ・サクソン人がキリスト教に改宗したことにより，ラテン（ローマ）文字が使われた．しかし，ラテン語にはない英語の音があったため，ルーンアルファベット（Rune alphabet）から th の音に þ（thornと呼ぶ），/w/に ƿ（wynnと呼ぶ）を取り入れ，また，d に横棒を入れた ð（ethと呼ぶ，[θ]と[ð]の音）と，aとeの文字を組合せた æ（ashと呼ぶ）を用いた．なお，ルーンアルファベットは，最初の6文字から“futhorc”とも呼ばれることがある．

（4）ルーンアルファベット

［Price（1998）p. 394］

（5）古英語のアルファベット
a æ b c d e f g h i l m n o p r s t þ ð u ƿ y

古英語では，k, q, x, z はまれにしか使われない．また，j, v, w の文字はない．/i/ と /j/，/u/ と /v/ の音が分化するのは近代英語以降である．

古英語では，発音と綴り字はよく一致していた．hwæt [hwæt] や wē [we:] のように，綴り字どおりに発音される．母音文字は単母音と長母音の両方を表し，長母音を文字の上の線で表す．ただし，現代では，独立した音素の /f/ と /v/，/s/ と /z/，/θ/ と /ð/ は異音の関係にあるので，f, s, þ, ð は有声音に挟まれると有声音で発音された．c は [k] と [tʃ]（前舌母音の前）の異音をもち，g は [g] と [j]（前舌母音の前）の異音をもつ．sc は [ʃ]，cg は [ʤ] と発音された．

3.2. 古英語の文法

古英語は，複雑な屈折語尾（inflection ending）で文法関係を表すのが特徴である．この時代は，名詞，形容詞，指示詞，動詞には語尾変化がある，完全屈折（full inflection）の時代と呼ばれている．

名詞には，男性・中性・女性の文法的な性，主格（主語になる格）・属格（所有を表す格）・与格（間接目的語になる格）・対格（目的語になる格），単数・複数，強変化・弱変化・ウムラウト変化の区別があった．

（6）古英語の名詞，形容詞，指示詞の語形変化

古英語男性名詞の屈折語尾

男性名詞		強変化 stone	弱変化 ox	ウムラウト型 man
単数	主格	stān	ox-a	mann
	属格	stān-es	ox-an	mann-es
	与格	stān-e	ox-an	menn
	対格	stān	ox-an	mann
複数	主格	stān-as	ox-an	menn
	属格	stān-a	ox-ena	mann-a
	与格	stān-um	ox-um	mann-um
	対格	stān-as	ox-an	menn

形容詞 gōd (good) の屈折語尾
（男性名詞を修飾する場合）

男性名詞		強変化	弱変化
単数	主格	gōd	gōd-a
	属格	gōd-es	gōd-an
	与格	gōd-um	gōd-an
	対格	gōd-ne	gōd-an
複数	主格	gōd-e	gōd-an
	属格	gōd-ra	gōd-ena
	与格	gōd-um	gōd-um
	対格	gōd-e	gōd-an

（屈折語尾は - のあとに記している）

古英語指示詞の語形変化

指示詞	男性	中性	女性	複数
主格	sē	þæt	sēo	þā
属格	þæs	þæs	þǣre	þāra
与格	þǣm	þǣm	þǣre	þǣm
対格	þone	þæt	þā	þā

強変化型の男性・中性単数の属格，ウムラウト型の男性単数の属格 -es が現代の属格 -'s として残った．強変化型男性主格と対格の複数 -as が，現代の複数の -s として残った．現代の ox の複数 oxen の -en は，弱変化型の複数語尾 -an が弱化したものである．ウムラウト（mutation；「母音変異」とも言う）とは，後続母音の影響を受けて，強勢のある母音が変化する現象である．この母音変異による複数形をもつのが，現代にまで引き継がれる man-men，foot-feet，tooth-teeth，goose-geese，mouse-mice などである．

形容詞も修飾する名詞の性・数・格に応じて語尾変化をした．さらに，指示詞が前にある場合は弱変化（þā gōdan menn（the good men）），ない場合は強変化（gōde menn（good men））をするという区別もあった．現代の比較級と最上級の語尾および不規則な good-better-best や much-more-most も古英語にまでさかのぼる．

指示詞も性・数・格に応じて変化した．現代の定冠詞の the は男性単数主格の sē から発達し，現代の指示詞 that は中性単数主格の þæt から発達した．

動詞には，過去・過去分詞の作り方により，大まかには現代の不規則変化と規則変化に対応する，強変化動詞（strong verb）と弱変化動詞（weak verb）があった．

（7）古英語動詞の活用

直接法			強変化動詞 drive	弱変化動詞 perform
現在	1人称単数	ic	drīfe	fremme
	2人称単数	þū	drīf(e)st	frem(e)st
	3人称単数	hē/hēo/hit	drīf(e)þ	frem(e)þ
	1, 2, 3人称複数	wē/gē/hīe	drīfaþ	fremmaþ
過去	1人称単数	ic	drāf	fremede
	2人称単数	þū	drife	fremedest
	3人称単数	hē/hēo/hit	drāf	fremede
	1, 2, 3人称複数	wē/gē/hīe	drifon	fremedon
過去分詞			(ge)drifen	(ge)fremed

強変化動詞は，母音の音質の変化である母音交替（Ablaut；「アプラウト」とも言う）により，過去形・過去分詞形を作る．強変化動詞は7種類あり，現代にまで残っている動詞の例を，不定詞 - 過去単数 - 過去複数 - 過去分詞（ge- 略す）の順に挙げると，以下のようになる．[ ] は現代の動詞の活用である．

（8）1 drīfan-drāf-drifon-drifen [drive-drove-driven]
2 cēosan-cēas-curon-coren [choose-chose-chosen]
3 drincan-dranc-druncon-druncen [drink-drank-drunk]
4 beran-bær-bǣron-boren [bear-bore-born]
5 sprecan-spræc-sprǣcon-sprecen [speak-spoke-spoken]
6 scacan-scōc-scōcon-scacen [shake-shook-shaken]
7 feallan-fēoll-fēollon-feallen [fall-fell-fallen]

弱変化動詞は，過去形に -(e)de，-te，-ode，過去分詞形に -(e)d，-t，-od という歯茎閉鎖音（[t] [d]）が付くのが特徴である．現代の規則動詞に相当するが，hear，lead，send，make，say，think，buy，have なども弱変化動詞であることには注意が必要である．

また，現代の法助動詞である can，may，shall，must に発達したのは，古英語の過去現在動詞（古英語の前の時代に過去形であった動詞をもとに，現

在形としてさらに過去形を作った）という特別な動詞であった．may は本来「力がある」という動詞であったため，現代の助動詞とともに，名詞の might（力），形容詞の mighty（力のある）が残っている．現代の must に過去形がないのは，古英語の mōtan（許可する）の過去形 mōste から，must が意味を変えながら発達したためである．

以上のように，古英語は，屈折語尾によって文法関係があきらかであったために，語順は比較的自由であった．

3.3. 古英語の語彙

古英語の語彙は約 85％が歴史のなかで失われてしまった．しかし，現代の英語に残っている 15％には，日常生活に必須の基本語と代名詞（I, me, us, he, which など），前置詞（in, at, on, over, under など），接続詞（and, or, as, if, while など），助動詞（shall, can など）などが含まれる．基本語の例として，man, wife, child, house, meat, fish, leaf, grass, day, eat, drink, sleep, fight, live, good, high, strong などがある．身近な語が残っていることは，もっとも使用頻度の高い現代英語 1,000 語のうち，8 割は古英語の語彙が占めるという調査結果にもうかがえる．なお，英語の曜日のうち，Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday にはゲルマンや北欧の神の名が残っており，古英語の故郷を示すものとなっている．

古英語の語彙の特徴は，接辞を利用した豊かな派生語と意味が容易に予測できる豊かな複合語にある．たとえば，mōd（mood，心）から mōdig（大胆な），mōdiglic（高潔な），mōdiglīce（大胆に，誇らしく），mōdignes（誇り），mōdigian（誇る，立腹する），gemōdod（気が向く），mōdfull（高慢な），mōdlēas（元気のない），さらに，mōdcræft（知性），mōdlufu（lufu=love, 愛情），mōdcaru（caru=care，悲しみ），stīþmōd（stīþ=stiff，頑固な）など柔軟な造語力があった．現代の名詞を作る接尾辞 -ness, 形容詞を作る接尾辞 -ful, -less, -some, -ish, -ly（līc から），副詞を作る -ly（līce から）は古英語からのものである．現代は造語力を弱めたが，-dom（wisdom），-hood（childhood），-ship（friendship），-red（hatred）も古英語の接辞である．動詞も接頭辞を利用して 1 つの動詞から多くの動詞が作られた．そのなかで，現代に残る withstand（抵抗する）の wiþ- は「逆らって」（against）の意味である．

古英語の造語力と想像力は，文学のなかではケニング（kenning）という